

おん が がわけい
遠賀川系土器 壺

あらかみ
弥生時代前期 荒尾南遺跡（B地区Ⅱ） 大垣市
岐阜県文化財保護センター蔵

弥生時代のはじめ、稲作や金属器などの新しい文化が北部九州から日本列島に広がりはじめます。遠賀川系土器は北九州を中心とする地域でそのころ生まれた土器です。北部九州の弥生人と朝鮮半島から移住してきた渡来人の交流によって作られたと考えられ、その後、水田や農具といった稲作の技術とともに西日本一帯に広がりました。この土器は稲作文化の指標とされ、美濃地方を含む東海地方には弥生時代前期のおわりに伝わったと考えられています。

遠賀川系土器は、平野部の大垣市荒尾南遺跡や岐阜市鷺山蝉遺跡などのほか、揖斐川町や山県市などの山間部の遺跡でも見つかっており、弥生時代前期の段階で美濃地域の広い範囲に稲作文化が伝わったことがわかります。
(企画展「実りの考古学—美濃の農耕事始—」にて展示)

企画展

実りの考古学 —美濃の農耕事始—

2025.3.29(土)~5.25(日)

美濃地域は弥生時代の早い時期に稲作の技術が伝わり、水田が作られ米作りが行われてきました。大垣市の今宿遺跡^{いまじゆく}や荒尾南遺跡^{あらおみなみ}など西濃地域の遺跡からは、弥生時代の稲作にかかわる遺構や農耕・土木工事に用いられた木製品などが多く見つかっています。また、可児市の柿田遺跡からは古墳時代に使われていたいくつもの水制遺構^{かんがい}が見つかり、灌漑施設を伴った農耕を行っていたことがわかっています。また、これらの遺跡からは農耕にまつわる祭祀^{さいし}にかかわる遺物も見つかっていて、人々の豊かな実りへの思いを感じられます。

この展覧会では、美濃地域で出土した農耕にかかわる遺構や用いられた農具、まつりの道具を取り上げ、弥生時代に稲作と出会った人々が、古墳時代、古代とその後どのように稲作とかわってきたのかを紹介します。

1 稲作の伝播

遠賀川系土器^{おんががわ}（表紙参照）が濃尾平野まで広がったころ、東海地方では別の土器文化が生まれました。条痕文系土器^{じょうこんもん}と呼ばれるこの土器は、貝殻や、植物の茎を束ねた工具で土器の表面に筋状の文様「条痕」がつけられていることが特徴です。東海地方で縄文時代の終わりに使われていた土器がルーツとなっています。この土器は、遠賀川系土器が出土しない地域に分布することから、東海地方に入ってきた水田稲作をはじめとする弥生文化に刺激を受けて在地の文化が顕在化したとも捉えられていますが、美濃地方の弥生時代前期の遺跡を見ると、遠賀川

系土器^{じょうこんもん}と条痕文系土器が混在して出土しています。弥生文化を伝えた遠賀川系の集団と縄文土器の系譜を持つ条痕文系土器の集団はお互いに対立することなく受け入れられていったようです。



条痕文系土器 壺
弥生時代前期 荒尾南遺跡（B地区Ⅱ）
岐阜県文化財保護センター蔵

2 水田遺構と今宿遺跡

大垣市の今宿遺跡では、弥生時代末から近現代まで断続的に作られていた水田が発掘されました。弥生時代や古墳時代には、水田が作られる場所の微地形や土壌によって制約を受け、形や大きさが決まります。また、水を得やすい立地ゆえに川の氾濫^{はんらん}などの被害を受けることもあったのでしょうか、水害によって土砂で埋没しても繰り返し同じところに田が作られた結果、いくつもの時代の水田が重なって見つかるのです。



古墳時代の水田に残された足跡
古墳時代後期 今宿遺跡
岐阜県文化財保護センター提供

古墳時代の水田には、田植えをしていたとおもわれる人びとの足跡が一面に残されていました。

3 稲作の拡大と農具

大垣市の荒尾南遺跡や可児市の柿田遺跡からは、弥生時代後期から古墳時代の木製農具が大量に出土しました。田下駄、石庖丁といった農具はもちろん、鋤や鍬は水田の開墾や水利灌漑施設の建設などの土木工事にも使われたのでしょう。写真の①は北九州で使われていた鍬で、日本海経由で東海地方に伝わりました。美濃では大垣地域だけで出土しています。②はナスを縦に二つに割ったような形をしているためナスビ形とよばれる鍬です。弥生時代中期に岡山県の吉備地方で生まれ、古墳時代前期には全国へ広まりました。鍬と名前がついていますが、刃が細く、本当に土を掘る道具なのかはよくわかっていません。



① 北部九州型直柄鍬 ② ナスビ形曲柄鍬
古墳時代 荒尾南C遺跡
岐阜県文化財保護センター蔵

4 赤彩の世界～豊穰・繁栄の祈り～

弥生～古墳時代の集落遺跡では、稲作文化と深く結びついた農耕儀礼が行われていたと考えられています。今宿遺跡では集落から外れた水田の畦から土器がまとまって出土し、農作業の無事や豊作などを願うようなまつりに使われた祭祀遺構だと推定されています。また、東海地域西部では弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて、パレススタイル土器と呼ばれる白い地に

赤い顔料と櫛描文で装飾を施した華やかな土器が出土します。普通の土器よりも丁寧に作られた美しい土器は、集落内の様々なまつりで使われたのでしょう。



パレススタイル土器 壺
弥生時代後期～古墳時代初頭 城之内遺跡
岐阜県文化財保護センター蔵

5 植生の利用

遺跡からは、植物を利用した様々な遺物・遺構が出土します。柿田遺跡では木材を組み合わせ、護岸・灌漑・水制などの施設がつくられました。そのほかにも糸巻具や杵や横植などの織物関係の道具、鍬の製作過程を材料・未成品・完成品と段階ごとに追うことのできる資料などを展示します。当時の人々の技術の高さと工夫を感じ取っていただければと思います。



水制遺構
古墳時代 柿田遺跡
岐阜県文化財保護センター提供

企画展

ちょっと昔の道具たち

2024.12.13(金)~2025.3.9(日)

今年度で29回目を迎えたこの企画展は、小学校3年生が学習する社会科単元「市の様子と人々のくらしのうつりかわり」に対応し、身近な道具のうつりかわりや暮らしの変化などを紹介する展覧会です。今年度は、「子どものころはどんなことをしていたの?」という点にフォーカスし、子どもたちから見た日常の生活を映し出そうと試みました。

【各コーナーの構成・主な展示資料】

1 「家のなか」コーナー

昭和10年ごろの岐阜の町屋を再現しました。そこでは子どもたちが行った多くの仕事を紹介しつつ、当時の暮らしのなかで特徴的な道具を展示しました。



まずは「振り子時計」。じっくりと見ると振り子の上に二つの穴が開いています。これは何の穴でしょう。この穴はゼンマイを巻くためのもので、そこにねじを差して回します。ゼンマイを巻くことで、時を刻み始めます。子どもたちは、家族の大切な「時」を刻むために毎朝穴にねじを差して回す仕事をしていました。

次に「五右衛門風呂」。今ならボタン一つで

できてしまうのですが、当時のお風呂の準備は大変な作業でした。主にその作業を担ったのは子どもたちです。まず井戸ポンプで水を汲み、風呂桶に水を入れました。風呂桶を一杯にするには、桶20杯分が必要であり、子どもたちが井戸ポンプとお風呂場を20往復して水を運び入れました。次に薪を運び、火をつけて沸かすのです。家族全員が生活をしていくために子どもたちは、大変頼りにされ、家族の一員として働いていたのです。

2 「学校」コーナー

昭和10年ごろの尋常小学校の教室を再現しました。昨年に引き続き、黒色の大きな黒板や二人掛け机、足踏みオルガン、印刷の道具として使われていた「ガリ版」を展示しました。



机の天板の端をよく見ると、小刀で削られた傷がついています。これはいたずらではなく、鉛筆を小刀で削る際に固定するためのものです。当時は鉛筆削りがありませんでした。天板は、上に持ち上がり、裏返すと、図工や習字で使う画版に早変わりしました。よく見ると絵具や墨汁の跡が残っています。

3 「まちかど」コーナー

昭和30年代から40年代ごろの「まちかど」の風景と暮らしの道具を展示しました。今回は駄菓子屋・喫茶店に加え、銭湯・レコード屋・たばこ屋・電気屋といった商店を再現しました。この時代は電化製品が普及したころで、電気屋

ではテレビや洗濯機、炊飯器などが売られていました。

また、この当時は、各家庭に浴室が必ずあるわけではありませんでした。浴室がない家庭は、まちかどにあった銭湯に行き身体を温めていました。

家族みんなで行った銭湯、母におつかいを頼まれ、買いに行った豆腐屋やタバコ屋。おばちゃんの作ったかき氷がおいしそうに並んでいる駄菓子屋。当時の子どもたちの楽しげな様子も自然と思い起こされます。



「まちかど」コーナーは商店だけではありません。路面電車が岐阜の街を走り抜けていく様子を再現し、よりその時代にやってきたかのような没入感を感じてもらえる展示にしました。

「まちかど」コーナーの住宅では、居間を再現し、ちゃぶ台を囲んで過ごした家族団らんの様子をイメージしました。



まちかどの入口には実際に買い物ができる「なんでもや商店」を設置しました。昔懐かしいおもちゃがたくさん販売され、子どもたちだ

けでなく、大人も童心に戻ったような気持ちで買い物を楽しんでいました。



4 「あそび広場」コーナー

ベーゴマやお手玉、だるま落としやけん玉など、昔ながらの遊びが体験できるコーナーを設置しました。



当時の子どもたちは遊びの天才でした。家のとなりに空き地が広がっていれば、そこは子どもたちの遊び場となりました。コマ回しやゴム跳び、ビー玉・おはじきなどで遊び、他にもそのあたりで拾ったものを使って遊びを作っていました。また地面や道路、壁だって子どもたちにとっては、キャンバスであり、落書きをする遊び場となりました。

こうした各コーナーでは、「ものしり博士」とよばれる多くのボランティアさんにご協力いただき、大人も子どもも楽しみながら学べる展覧会となりました。

博物館ニュース

岐阜市が生んだ日本画の巨匠

加藤栄三・東一兄弟の世界にふれる

加藤栄三・東一記念美術館

金華山の麓岐阜公園内にたたずむ当美術館は、岐阜市出身の日本画家で、全国的に高い評価を受けた、加藤栄三・東一の画業を顕彰するとともに、地域の芸術文化振興に寄与することを目的に運営を続けてきました。

開館当初から加藤栄三・東一記念美術館の第1展示室では栄三・東一の作品をテーマ別に展示し、第2展示室では岐阜で活躍する作家や美術団体を紹介する企画展をメインに事業を行ってきました。



加藤栄三「雷神 (小下絵)」

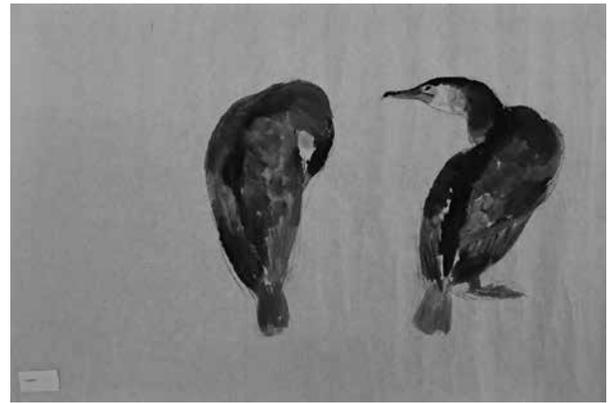
地域密着型の美術館として地元作家を紹介するメリットを活かし来館者数を確保してきた半面、誰もが使えるオープンギャラリーと同列であるとの誤解を招くといった課題が残りました。

1 加藤記念美術館の抱える問題点の改善

開館から26年余りが過ぎた頃から、美術館として作家、展示内容を可能な限り刷新し、美術館のイメージチェンジに取り組んできました。岐阜という地域に古くから根付いた美術文化とは異なる視点からのアート作品や、コンセプトを重要視したアート作品を取り上げ、企画展の中で紹介してきました。

こうした新たな試みの展覧会企画は、良質な作品を求めて美術館巡りをする造詣の深い美術愛好家やマスコミ関係者から一定の評価をいた

だくことができました。



加藤東一「鶇 (素描)」

2 美術館の役割について

良質な作品と展示は、人と人を結び付ける場所として、社会の中で大きな役割を担っているのではないかと思います。人と人を繋げるためには良質な作品と展覧会が必要であり、これは美術館のもう一つ重要な役割であると感じています。

芸術文化の振興という観点のみならず、地域発展につながる交流の場所を提供するという役割も忘れず、企画展内容を厳選していく必要があります。時間はかかりますが、少しずつこうした美術館の新たな理念をご理解いただけるよう努力してまいります。

3 美術館の新たな試み

加藤栄三・東一記念美術館は、建物のおよそ半分が土砂災害特別警戒区域に位置することから、来館者の安全確保のための構造補強工事の実施に伴い、令和6年6月から休館していますが、4月15日（火）から再オープン予定です。再オープン後は、これまで第1展示室で開催してきた加藤栄三・東一の常設展示内容の見直しを検討しています。技術的な熟練度や経歴にとらわれず、独自性や自由な表現作品に込められたコンセプトを重視したアーティストのために開放したいという考えのもと、アーティストの魅力あふれる作品を積極的に紹介していきます。

博物館ニュース

総合展示室リニューアル について

岐阜市歴史博物館総合展示室は、開館20年となる平成16年度にリニューアルを行い、多くのお客様を迎えてきました。その後19年が経過し、今では展示設備の老朽化がみられるようになりました。これに加えて、令和4年4月の博物館法の一部改正により、これからの時代にふさわしい博物館の在り方が示されるとともに、博物館の立地する岐阜公園では再整備事業が進行しています。これらを受け、新しい博物館法に沿いつつ、各事業との連携を図りながら、本市固有の歴史文化の発信・活用を通じての地域の魅力向上、シビックプライドの醸成、入館者数の増加を図ることを目的とし、総合展示室のリニューアルを実施することとしました。

新総合展示室の展示コンテンツについて

リニューアル後の総合展示室は大きく5つの展示構成を計画しています。

1 んふタイムマシン

来館者が最初に目にするのは、昭和の岐阜と多くの市民に親しまれてきた路面電車のタイムマシンです。電車に乗ると、車窓から見える映像によって戦国時代へタイムトリップします。路面電車から降りると、楽市場の風景が広がっています。

路面電車（タイムマシン）に乗り込んで戦国時代までタイムトリップする設定とすることで、次の「戦国コレクション」「タイムトリップ in 城下町」の世界へと惹きこみ、展示への高揚感を高めます。

2 戦国コレクション

楽市場（ぎふタイムマシン）から、戦国の岐阜城下町（タイムトリップ in 城下町）まで歩みを進める間に、実物資料の展示を観ながら当時の息吹を肌で感じることができます。

織田信長、戦国時代の岐阜に関する情報を、実物資料とともに伝え、来館者の好奇心を高めます。

3 タイムトリップ in 城下町

宣教師ルイス・フロイスが岐阜を訪れた永禄12年（1569）頃の岐阜城下町に足を踏み入れます。城下町には、武家屋敷のほか、様々な業種の町屋が並んでおり、当時の暮らしの体験に加え、発掘資料などの「本物」の資料を展示することによって、城下町への理解を深めます。

4 マイ・トレジャー・ウォーク

戦国時代を出た来館者は、原始から近現代までの岐阜の歴史の流れの中から「あっ、これ好き！」と思う資料を発見します。岐阜市の通史を概観できる内容とすることで、次の「ぎふヒストリー展示」の理解促進に繋がります。また、デジタルアーカイブ化された博物館資料を活用し、来館者が知りたい情報を簡単に閲覧できるようにします。

5 んふヒストリー展示

季節やその時々話題に応じた展示替えを行い、毎回違った岐阜の魅力を提案することで、リピーターを増やし、交流人口のみならず関係人口の創出に寄与します。加えて、岐阜の文化や歴史の新たな一面を知ることにより、市民の岐阜への愛着を創出し、シビックプライド醸成につなげます。

リニューアル後は市民の皆さまと連携しつつ、岐阜市の魅力を発信する拠点施設として、市外から岐阜を訪れる方がたに「岐阜をもっと知りたい」と感じてもらえる博物館を目指してまいります。

館蔵資料紹介

はらさんけい いずかのがわしよけん 原三溪「伊豆狩野川所見」

紙本墨画淡彩 昭和4年(1929)

総 208cm×45cm 本紙 135cm×34cm

【作品解説】

原三溪(1868～1939)は佐波村(現岐阜市柳津町)の出身で、若くして上京し、近代を代表する実業家の1人として活躍しました。一方、古美術の蒐集家としても著名で、自身でも多くの書画を制作しています。

本作品に描かれた狩野川は、伊豆半島を流れる狩野川水系の本流で、江戸時代から鮎の友釣りが盛んなことで知られています。この年、三溪は伊豆長岡の別荘に田舎家を移築しており、本作品にも三溪がこのころ実際に見た情景が反映されているものと想像されます。川釣りをする人や川辺で酒を飲みくつろぐ人々のユーモラスな表現が印象的な作品です。本作品は、4月13日(日)まで分室「原三溪記念室」にて展示予定です。



利用の御案内

■ 開館時間 午前9時～午後5時

(歴史博物館の入館は午後4時30分まで)

※特別展開催中は変更することがありますのでご注意ください。

■ 休館日 毎週月曜日と祝日の翌日、年末年始

(12月28日～1月3日)

(月曜日が祝日の場合はその翌日)

※特別展・企画展開催中は変更することがありますのでご注意ください。

■ 観覧料

高校生以上…310円(団体250円)

小中学生…150円(団体90円)

※特別展はその都度料金を定めます。

※団体は20人以上

※下記の方は無料でご観覧いただけますので、①②の方は証明できるものをご提示ください。(ミライロID可)

①岐阜市在住の70歳以上の方(特別展を除く)

②身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、療育手帳、難病に関する医療受給者証の交付を受けている方、及びその介護者1名様

③家庭の日(毎月第3日曜日)に入館する中学生の下の方

④③に同伴する家族(高校生以上)の方(特別展を除く)

⑤岐阜市内の小中学生

※原三溪記念室は、無料でご観覧いただけます。

■ 交通案内

JR岐阜駅・名鉄岐阜駅から岐阜バスにて長良方面行きに乗り、「岐阜公園歴史博物館前」で下車、徒歩約5分。

お車でお越しの際は、岐阜公園駐車場をご利用ください。

詳しくは岐阜市歴史博物館ホームページをご覧ください。

<https://www.rekihaku.gifu.gifu.jp/>



＜原三溪記念室＞

岐阜バス茜部三田洞線 下佐波及びカラフルタウン行きに乗り、「下佐波」で下車、徒歩2分。

岐阜バス茜部三田洞線 もえぎの里及び高桑行きに乗り、「もえぎの里」で下車。

博物館だより No.119 2025.3

編集・発行 岐阜市歴史博物館

(分館) 加藤栄三・東一記念美術館(4/14まで休館)

(分室) 原三溪記念室

〒500-8003 岐阜市大宮町2-18-1 ☎058(265)0010

〒500-8003 岐阜市大宮町1-46 ☎058(264)6410

〒501-6121 岐阜市柳津町下佐波西1-15 もえぎの里2階 ☎058(270)1080